

研究の棗

日本古建築研究の棗 (第二十三回)

工學博士 天 沼 俊 一

第三十 扉 (下の二)

前號の終りに近く「圖版丈だけは江戸時代まで殆んど全部入れることにした」とかいたが、其後態々材料なりに長崎まで出かけ、相當のみやげを持つてきたについては、どうしても夫れ等々のせて一通り解説をした方が、尙一層徹底すると思つたから、必要な丈けのせる事にした。ところが其後説明が又復長くなり、前號に約束した通り今回丈けでおさまらなくなつてしまつた。そこで止むを得ずもう一回のばし、十月を以て終了とする。尙ほ扉に就て訂正増補も亦次まで延期しておく。

(棧唐戸のつゞき)

江戸時代

になつては、贅澤極る非常に手の込んだのができてきた。勿論一般にはさうでなく、中には氣の毒な位のもあつたが、ある程度迄費用に制限なしで造つたと思はるゝ日光廟の夫れの如きは、どうも實に大したものである。中でも東照宮のは、さすがに家康の丈けあつて、比べものがない位。拜殿のをみても其贅澤さ加減驚く許りであるから、話に丈けきいてゐる内々陣の厨子等のはごんなであらうか、棧唐戸にしても板唐戸にしても、途方もないものと思はれる。

第一にだすのは日光東照宮神庫のもので、これは第一四四圖㉔の如く極くあつさりしたもの、たゞ上の方に大してうまくない格狭間が入つてゐる丈のことである。かやうな例はこゝにも大猷院にもいくらもあるし、別に圖をだす必要もないかも知れぬが、たゞこの様な式のもあるといふ例にあげたまでである。框と棧との交叉點には辻金物を、上框及び上横棧には、一文字型の飾金具を打つてゐるから、扉面は中々賑かである。さうして格狭間内の盲連子は緑青を、其他の部分は黒漆を塗り金具は鍍金があるので、見たところは甚だ綺麗である。當代の面は凡帳面の様なが多いが、(第百三十)これは㉕の詳細圖の如く大分に圓味がつけてあるから、角張つてゐないで餘程工合がよろしい。

第二には同じく日光大猷院唐門の扉について記載する(第百四十四圖㉖及第百四十九圖參照)。棧と框とは特殊の線形を

有すること、第一四四圖㉔の如く、扉面の下から2/3位のところを、中堅棧を以て四つの正方形に區分し、各正方形内に一種の線形を有する細い木を井桁に組んで入れ、棧と框及びこの井桁の交叉點には、複雑なる飾金具又は飾鉈を打つてゐるから、これ丈けでも中々賑かだのに、入子板の面には一面に幾何模様を刻みだし、其上を牡丹唐草其他を以て充填してあり、板の面は漆箔、彫刻は赤・群青・緑青等を以て彩色がしてあり、框と棧とは黒漆塗、飾金具は無論塗金だから、甚だ美しい。殊に入子板の面には、紗綾形（ヤガタ）が刻んであるので、光線を反射して一層美事である。扉面の彫刻は正面の分左の通り

浪		格狭間	
内鳳凰		内鳳凰	
牡丹唐草	牡丹唐草	牡丹・牡丹唐草及其圖案化模様	牡丹唐草及其圖案化模様
同上	同上	同上	同上
牡丹唐草	牡丹唐草	牡丹唐草	牡丹唐草

上から二番目の廣間の變形格狹間内に極彩色の薄肉彫鳳凰を入れたところ、其源は手近いところでは同圖(6)である。換言すればこれと全く同じ意匠で、たゞ夫れを少し込み入らせた丈けの事である。圖上(6)と(8)とを比べてみると、細かいところが略してあるから、大體が似てゐるので誰人も氣がつくであらうが、實物は取扱の精粗と色彩の配合等に眩惑されて了ひ、兩方が同じ意匠から成つてゐるので、さう驚くに當らぬといふ批判を下し得る人は澤山はないやうである。

同夜叉門の扉も亦同様であるが、この方は上の廣間に唐門より一層締りのない格狹間内に、割合に荒い目に縦横の棧を組んで花狹間とし、其他の間には全部牡丹唐草が入れてある(第十圖)。これは全部が黒漆塗で、唐門の夫れより寫生的であるのは、この兩圖さへ比較してみれば、別段解説をかないでもいゝと思ふ。

此の牡丹は中央に花が咲き、其下の中央から唐草即ち葉が左右に出て上に曲り、花の兩肩で二つに分れ、一つは中心の上に集つてゐるから、全體は心臟型即ち「猪の目」を逆にした様である。もう一つは左右の隅に向ひ、其終るところに兩方に葉を副へた蕾が一つづゝついてゐる。この中央の花と左右上隅の蕾とが重要なのである。この意匠は既に鎌倉時代からあつたのである。

大正九年七月一日發行、本誌第五卷第三號に於いて、私は墓股のことを論じたが、其うちに墓股が鎌倉時代に長足の進歩をした事をかき(第一〇頁)、尾道市淨土寺多寶塔の牡丹に揚羽蝶をあしらつた彫刻を入れたのを例にあげ(同一〇六頁)、尙ほ第二三圖の一番上に圖を掲げておいたが(同誌を所持せられぬ諸選圖)があれば、同じことだから其第二三圖を見れば、あのよりよい。あの方が大きいから、反てよく解るであらう。あの兩肩から出た骨線の途中から蕾がでゝ、其蕾にあげは蝶(有「尾」の)が一つづゝ止つて大きな翹を動か

しつゝあるところが刻んである。これと同じ意匠で、心持ち簡單なのは、尾道市まで行かずとも、京都府相樂郡加茂村大字兎並 (Usami)、村社御靈神社本殿墓股にある(この圖は大正九年六月十日發行の雜誌「建築新報」第二卷第五號第一三頁に掲げた。將來ある時機に再び圖示するつもりである)。この神社は大凡南北朝頃であらうと思はれる。

墓股内部の彫刻に於いて、骨線が兩肩から中央に向つて遂に交會し、そこに花が咲いたのから間もなくさうでなくなり、今度は中央の花から左右に向ふ様になつてきた(近江油日神社樓門の一例としてひく。第二十三圖②)。室町から桃山になると、例へば京都市豊國神社唐門

其他の如く、兩肩から中央に向はずに、中央の花から唐草が左右にで、うまく輪廓内におさまる様になつた(第五卷第三號第一〇。尤も室町以降の分九頁第二十四圖②)。花は牡丹ではないが、何であつても意味は同じである。牡丹と蕾の例は第一四三圖の六波羅密寺厨子の扉を見ればいゝ、これなら立派な例とす

ることができる。

以上少し長かつたが、あれ丈けを心得ておき、扱てこの圖をみると、全く同じ系統同じ意匠であることが判る。墓股の様な一種の輪廓内にあつた牡丹の花と蕾とは、厨子の扉になつて細長い長方形の内にゆつくりと納り、中央に寫生的の花——其意は左右相稱でないから——と左右上に蕾とを入れたが、夫れと全く同じで、今度は中央を上下に通る線に對して、花も葉も蕾も幹も凡て相稱になつたのである。

大猷院廟のできたのが承應二年で、東照宮の方が寛永十三年だから、時代はさかさまになるが、坂下門扉の牡丹(第一百五十一圖)の中央の花、葉の唐草、及び左右上隅の蕾は、正に六波羅の直系である。ただ彼の簡が幾分此に於いて複雑になつたに止るのである。理窟からもさうだが、事實からも日光の建築が桃山式であるのを否むことはできまい。前

置きに比べて本論が短かく、あつけない様であるが、次の第百五十二圖に掲げた

東照宮石の間の扉また牡丹入である、牡丹つきにこれを研究してみる。拜殿も本殿も此の種のは同じ様であるが、前者のは兩折兩開である。ただ夫れ丈けの事で他に變りはない。

此れは特別詔贅澤扉で、框と棧とは黒漆塗に一面の金蒔繪、飾金具は辻丈けでは承知ができず、圖の如く澤山に詰めて打ちつけ、鉸にも一々丁嚙な座をつけ、其上に中心には別に大きな六葉座をつけたが、其辻に當るところは特に二重の六葉とし、下の方の六葉には各葉に一つづゝの七寶を入れたのである。

同じく花狹間を入れるにしても、ありきたりのではつまらぬところから、大廣間内に更に四隅に少しく手加減をした輪廓をつくり、其内に縦横に一つ隔きに吹寄にした棧を入れてある。この花狹

間の輪廓と、堅框及横棧から成る廣い間の夫れと形が少しく違ふのは、内部の格子の配置から來たのである。

他の部分は全部牡丹で填めてある。大きい間四つの中で、右上と下の二つとは四隅に蓄がある。前例と比べると、上二つでは物足りないし、丁度上下に細長い間だから、よりよく見せるためにかうしたのかも知れぬ。然るに左上の丈けは、兩方の上に蓄がある丈けで、下の方はたゞ唐草が巻いてゐる丈けである。これは多分二三人の彫刻家がこれを刻んだので、甲のつくつた三つと、乙の分一つとをこゝに倣め込んだのか、或は同じ一人がいろ／＼勝手につくつたかであらう。この四つの部分のは、一つとして同じのはないから、どうとも考へられる。記録を調べたら判明するかも知れぬが、今そのひまがないから他日に譲る。

拜殿正面兩折の分は、間がこれより大分堅に長



第百二十六圖 崇禰寺第一峰門扉

昭和貳年三月一日・天沼写真

これは曲尺の尺

第百五十七圖 崇福寺大雄寶殿片折片開扉

昭和三年四月可・天沼寫真



第百五十八圖

福濟寺大雄寶殿脇窓扉

昭和三年三月三十一日・天沼寫眞

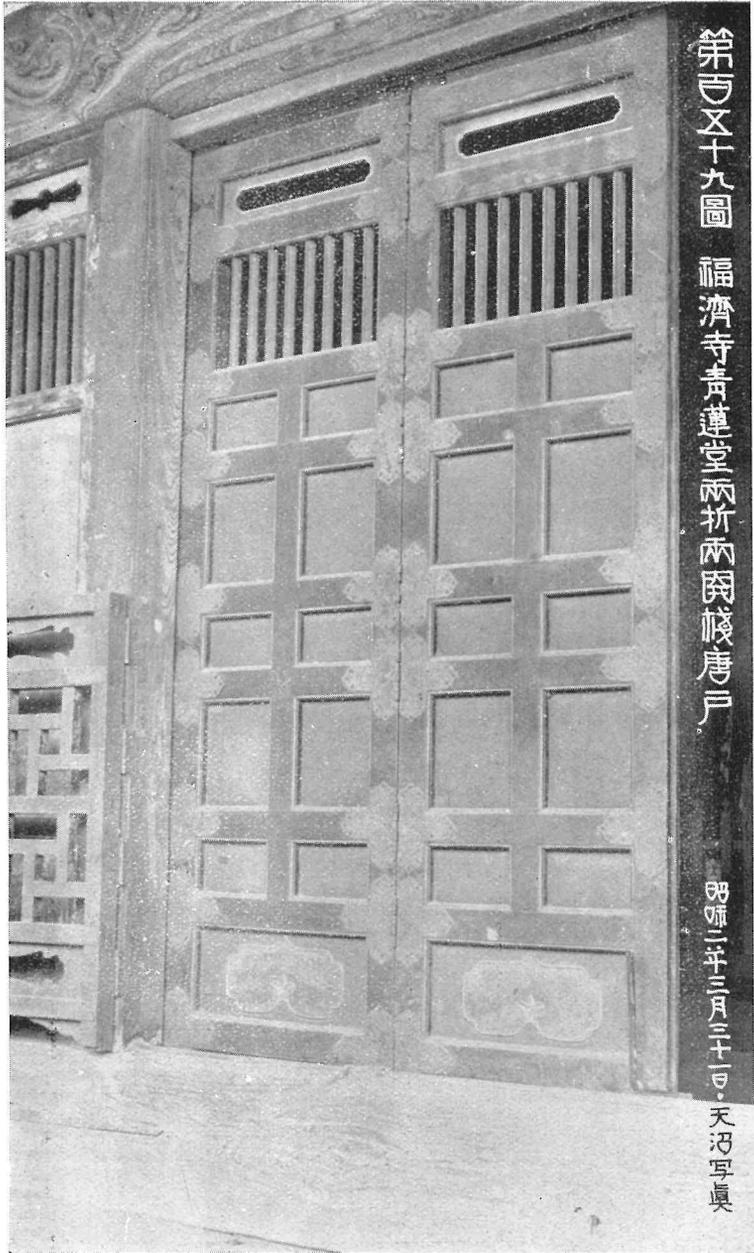


これは曲尺の一尺

第百五十九圖

福濟寺青蓮堂兩折兩開棧唐戶

明治三十二年三月二十日・天沼写真



第十二卷

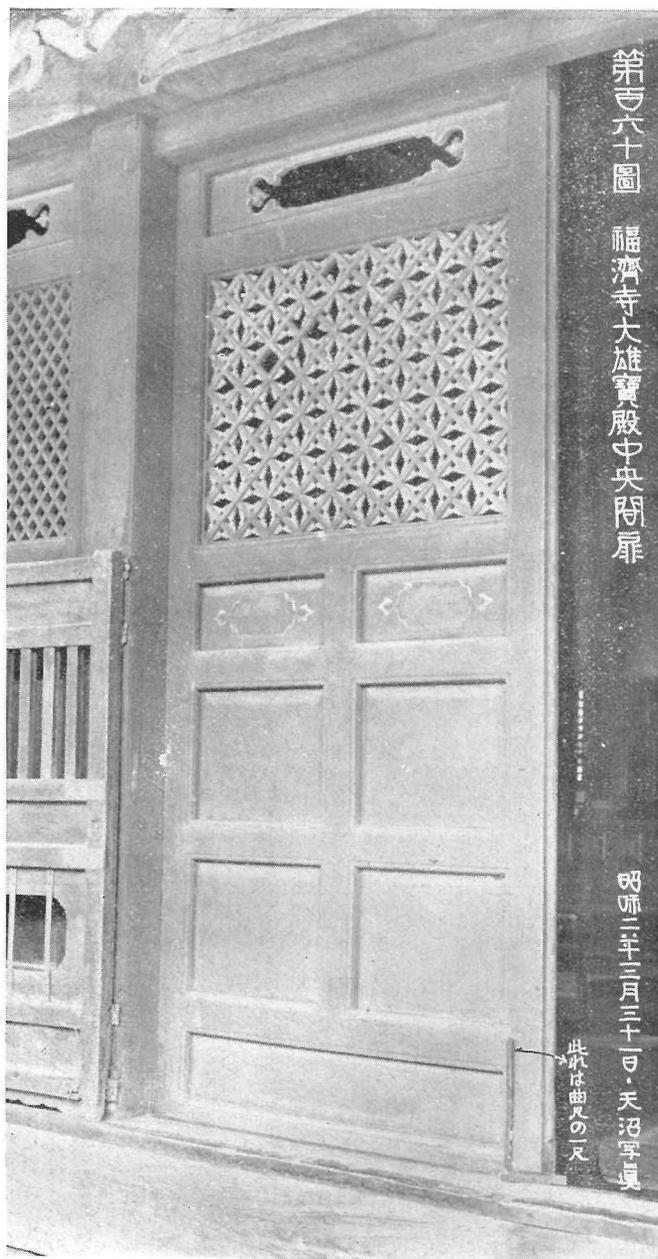
研究の棧

日本古建築研究の棧

第三號

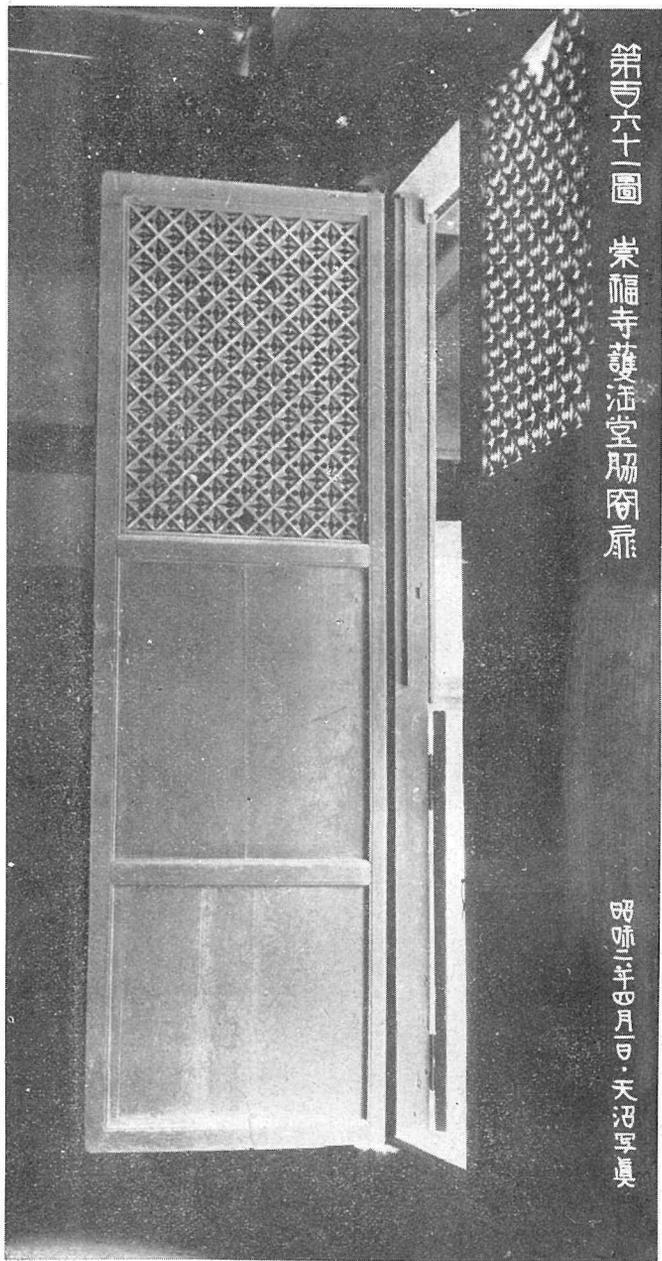
一三一

(四七九)

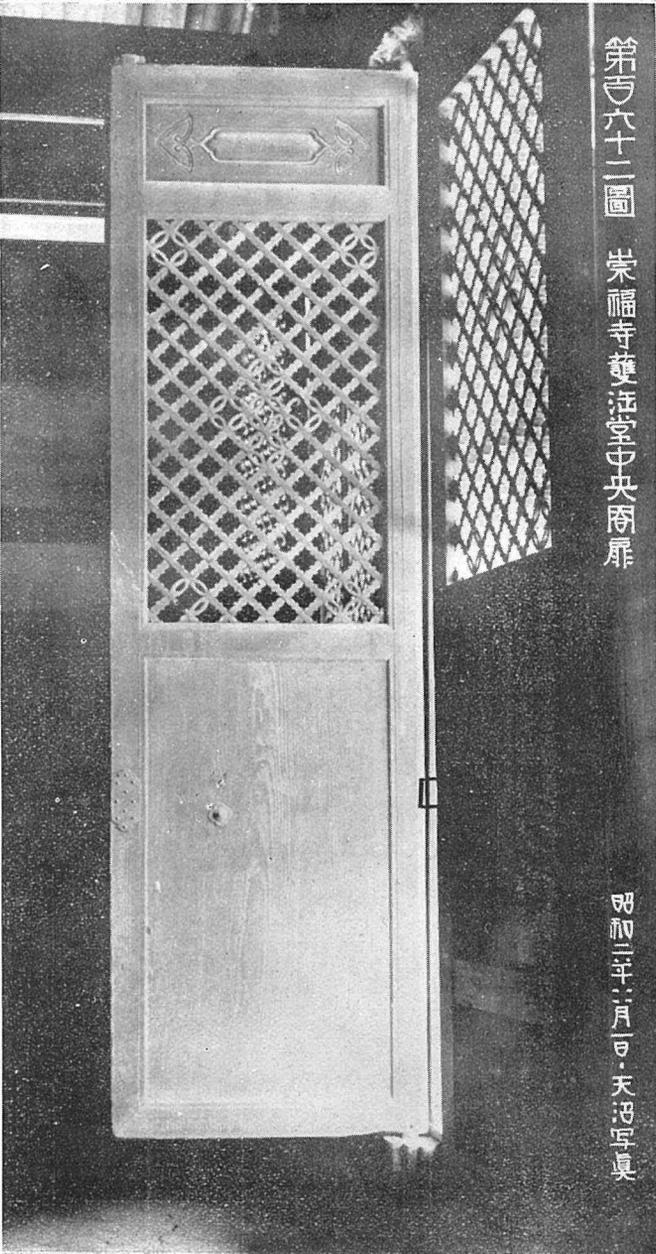


第六十一圖 崇福寺護法堂脇窓扉

昭和二年四月一日・天沼写真



第六十二圖 崇福寺護法堂中央扉

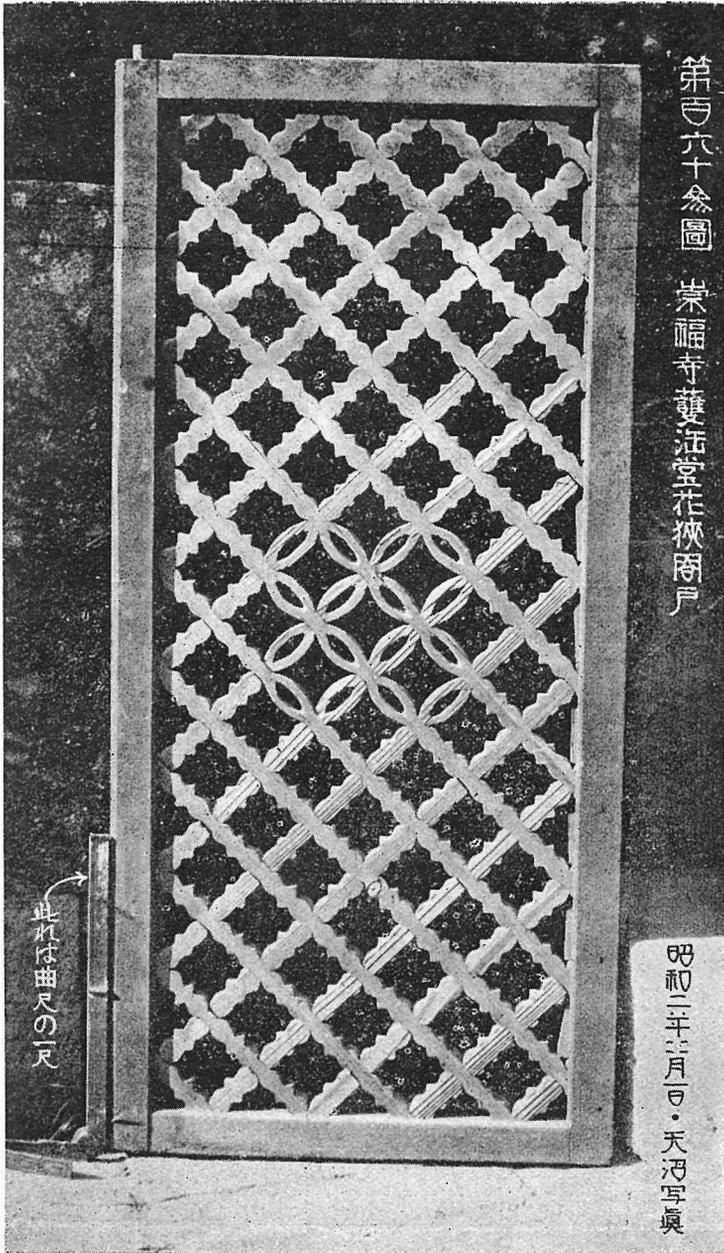


昭和三年二月一日・天沼写真

第百六十餘圖

崇福寺護法堂花狹戸

昭和二年三月一日・天沼写真



此れは曲尺の一尺

第十二卷

研究の葉

日本古建築研究の葉

第三號

一三五

(四八三)

く、蕾は兩上丈けの様であり、牡丹は何れも少しづつ異なる。尤もこれは、全部同じに刻めど嚴命されても、機械でつくらぬ以上出来ない相談で、異ふのが當然である。

小間には長いのご半分のご兩方あるが、何れも其中の中心に花があり、左右に葉がでゝゐる。これは前代及當代の類例を比較してみれば、こゝに説明の必要はなからう。

私は拜殿や本殿の扉を全部調べたのではないから、よく一つ一つ検査したら、或は殆んど同じと思はるゝのがでてくるかも知れぬ、併しながら、今私の知つてゐる程度では、以上記した如くである。この調べは今年の夏まで延期しておく。

次は同唐門の扉に移る。第百五十三圖は全形で、第百五十四圖は其一部であるが、主要な部分は皆でゝゐる。前例の如く全部蒔繪をしたり、七寶入の飾金具を打つたりしてはないが、大間の植物は

木の象眼で、これもまた可なり手のかゝつたものである。扉面の裝飾左の通り(但し向て左の扉正面)

唐 草			
卍菱		透彫	
牡丹		唐 草	
に 格狹 間内 梅	牡丹 唐草	に 格狹 間内 梅	牡丹 唐草
唐草	牡丹	花	牡丹
他 一 種	岩に 牡丹	牡丹 唐草	他 一 種
牡丹		唐 草	

花狹間の位置は、この際「卍菱」を繋いだ透彫にしてある、これは花欄間ともいふべきもので、其輪廓も亦丁嚙な幾何模様をはつてある。こゝから以下は、横棧も中堅棧も吹寄になつてゐるから、四つの正方形の大間と、長短長方形の間六つと、中央に小さい正方形が一つできてゐる(圖參)。大正方形の中は幾何模様を刻んだ入子板に、唐木を以て植物——菊・牡丹・梅等——を象眼にしてあるが、これ等の植物は何れも圖案的でなくて、繪畫

的である。格狭間の形が物足りぬ點を除くと、象眼植物はよくできてゐる。

其他の長方形の小間のうち、上下の長い二つには、中央に大花、左右適當なところに小花をつけた牡丹唐草、上下左右の短い長方形の間には、中央に花の一つある種類が入れてあるが、上下と左右と意匠が變へてある。中心の小正方形の間は、唐草を入れるには餘り小さく餘地がないので、花丈けにしてある。

此の方法は洵にうまい考へのやうであるが、實は前代にあつた方法を踏襲したに止るので、私共が本派本願寺四脚門の扉に於いて、今でも見るこゝができるのである。この場合に縦横の棧が吹寄だから、同じ様な形の間ができてゐて、そこにはもつと込み入つた牡丹唐草が入つてゐるが、考へはこれと同じである(前)。東照宮の、方がこれより後れるから、前者が後者の意匠をとつたとするの

は當然な考へ方である。

框・板・入子板共全部胡粉を塗り、面は總て几帳面で、嵌入又は打付たる彫刻は素地のまゝである。圖に於いて色が違つて見ゆるのは、彩色の相異でなく、材質の差で即ち自然の色の差に基いてゐるのである。飾金具は金銅なるも、前例程のものではない。扉全體白と金とから成つてゐる感がある。さつぱりしてゐて割合によろしい。

愈よ終りに再び大猷院へ戻つて、あひの間の扉の一部を圖示しておく(第十五圖)。これは兩折の手先の内側、本殿に向つて右即ち東側のである。几帳面取の框と棧との間に、次の様な薄肉彫刻が入子



板につけてある。本殿のも同じ意匠からできてゐる。圖は獅子二疋と牡丹唐草一つと、上の龍が約

1) 5位見えてゐる。これ丈けでは判るまいが、獅子も龍も全部姿勢が違つてゐる。これは先刻の牡丹唐草とは異り、態々かへやうとしなければならぬので、葉の先の巻き工合や花瓣の形の様に、ほりがけに刀の先位では取扱ができぬ。これは夫れだからさう容易にはいかない。

併しながら、扉の入子板に一つ一つ異なつた姿勢の獅子を入れることは、例の本願寺の門扉(前號第八十三頁上段より下段にかけて参照)に於いて見出すのである。けれども入子板四隅に「散入双」の様な彫刻をつけたり、板の面に幾何模様をだしたりしたのは、未だ前代には見出さなかつたのである。

京都市五條通の東端、本派本願寺祖廟即ち一般には「西大谷」として知らるゝ廣大な地域を占めた建物の正門に吊込んである兩開棧唐戸は、上方の廣間に「箴欄間(オサランマ)」(後出)を入れ、其兩面に大きな桐葉を二つ並べてつけてある。此の門はいつできたの

か調べぬから知らぬが、大分に新しいから明治かも知れぬ。これは第一三六圖⑤に示した三寶院唐門扉の連子が一つ下つて下の間にきた上、ほそく細かく割れて箴欄間となり、桐も亦分裂して二つになり、其面に適當な位置に配置されたとみられる。即ちこの扉は、この點に於いて桃山系統たることを充分に現はしてゐると考へていゝのである。この様な例はさがしたらまだあるであらう。

以上のほかに黄檗宗の寺にある棧唐戸七種を次に圖示して一通り解説をしておかうと思ふ。これ等は何れも様式が特殊であると同時に、手近なところ(宇治の萬福寺や大阪市の鍛眼寺を除いては)にないために、近畿又は關東方面の讀者諸君は、行つてみる機會が少ないと思ふから、なるべく多く登載することにしたのである。これ等の八圖は何れも長崎市所在の崇福寺及福濟寺諸堂の扉である。

第一五六圖は崇福寺第一峰門のである。峰門と

は關門といふ様な意味で、最初龍宮造の三門(扉は
ある機會に圖示すること
にして今は省いておく)を入つて石段を二つ上つたところにある、一間一戸の餘程様式の變つた門である。これは圖の通り棧唐戸であるが、横棧を以て扉面を六等分し、中央から下に丈け中堅棧を入れ、上の方は中央の間に菊花、四隅に蝙蝠をつけてある。蝙蝠は何のためにつけてあるのか、きいてみたがよく判明しなかつた。蝙蝠は丁度兩眼に當るところを鐵鉞を以て打ちつけてあるのは、中々うまいやり方といへる。扉は棧も框も入子板も丹塗で、これ等の動植物ばかり彩色が施してあつたと思はれるが、今は剝落してゐる。菊は組物の間に、蝙蝠は妻の懸魚に夫れ夫れ用ひられてゐるところをみると、何か餘程理由があるらしく思へる。さすがに「唐寺」丈けあつて、大分目先が變つてゐる。

第一五七圖は片折片開の例。同寺大雄寶殿の正

面兩脇の間の扉である。これは中央に縦に三所蝶番が打つてあるので判る通り、先づ中央から外に二つに折れる、だから開くときはこゝに見えてゐる面は合さり、さうして向て右端にある蝶番で内方に開く機になつてゐる。元來かゝる場合は、兩開にすべきであるのを、無理にかうしてあるから、手先は重いために下サガつてゐて、開閉に手間がかゝる。これは全く内部を廣く用ふるために考へつたのであらう。扉の上の方には荒い目の連子があ
るが(臨時に紙が貼つてあるが、貼、
らないのがほんとうらしい)、この連子の斷面の形が特殊で  形をしてゐる。序ながら此の宗旨の寺に用ひてある連子其他の格子は、殆んど總てこの形である。

第一五八圖は福濟寺大雄寶殿脇の間のである。これは普通の棧唐戸と變りはないが、たゞ最上の間に透刻、次は少し太い目の箆欄間の様な格子、其次と最下との狭い間には、一種格狹間の變形し

た様な形を刻してある。扉は赤いのに、この形の輪廓は金で内部は緑青が塗つてあるから、可なり色彩は賑かである。併しながらごごとなしにゴツゴツしてゐて、洗練の度が足らぬ扉である。

第一五九圖は同じく福濟寺青蓮堂(觀音堂)の中の間に吊つてある兩折兩開棧唐戸である。上の方の廣間に入れてある八本の連子また前圖のと同じ斷面をもつてゐる。最下の間の格狹間型は、これまた金輪廓の内縁青である。さうして見たところ前と同じ様な感があるが、周圍の框に丈け鐵製飾金具が打つてあつて、中豎棧及横棧に一つもないところは、他の同宗の諸堂の扉とも、前に例にあげた諸棧唐戸とも、何れとも趣を異にしてゐる。

第一六〇圖以下の三枚は花狹間入の例である。

先づ第一六〇圖からかくが、第一五八圖が脇の間なるに對し、これは中の間のである。即ち箴欄間式の格子でなく花狹間が入れてあるが、餘り込み

入つてゐるから少しくうるさい様な氣がしなくもない。花狹間の45°に組んである骨は、組み方が可なりぞんざいで、きちんと合缺きになつてゐるところもあるかと思ふと、殆んど組めてゐない所もある。扉は例により赤く骨は黒く花は緑に塗つてある。入子板の面にはりしづめてある格狹間の變形は、色彩第一五八圖の場合と同様である。

第一五八・一五九・一六〇圖に掲げた三種の扉は、入子板は平面でなく、四方が中央より際立つて薄くなつてゐる。即ち中の大部分が平たく高く四周が急に薄いから自然四隅に約45°に線がついてくる、これが此の種の扉の一特徴といへる。

第一六一圖は殆んど前圖に似てゐる、たゞ表面に横棧が一本(裏面に三本)で中豎棧がないのと、花狹間がこまかい丈けの差で、總て材料が細いから、前圖とは見違へる程きやしゃで、従つてこの方が遙によく見える。これは花が赤く塗つてあるため、前

のほど良く見えぬが、色彩は當初からかうであつたかどうか知らぬ。

護法堂(崇福寺の)は出入口が三所あるが、何れも異なつた扉が吊込んである。これは左端ので、次に掲げるのは中央のもの、もう一つ右端のは第一五七圖の様な連子入のである。福濟寺もこゝも、中々扉について計劃者が趣味をもつてゐると見えて、

一つの建物にいろ／＼變つた扉を用ひてゐる。他の宗旨では、大概一つ建物には一種類の扉で、例へば鶴林寺本堂(播州加古川)の如きは七間七面即ち總數二八のうち、二一間迄は出入口で何れも同じ種類の扉が吊つてあるのに、これは一四(五間三面なるも正面一間通り吹き放して)間のうち出入口は僅に三間で、其三間に三種類の扉が用ひてゐるのは面白い對照である。

第一六、二圖は中央のである。これは花狹間の部四隅の間づゝと、中央の連續した九間丈けが七寶型になつてゐる。これは何でもないことである

が、其部分を膨ませるためには中々手間がかゝつてゐるし、結果も大分目先が變つてゐて面白いが、肝心のところの背景に隣りの扉の花狹間のところが重なつたので、少しく明瞭を缺いてゐるが、この七寶繋ぎのところは次圖をみれば充分に知るこゝとができるのである。

宇治の黄檗山萬福寺の堂、例へば佛殿には、兩開や兩折兩開の扉がある。何れも棧唐戸で、半分から上は細い狭い格子——箒欄間の様なもの——になつてゐて、内部から紙が貼つてある。だから棧が外から見えてゐるところは(敢て黄檗の建物に限つゝ)正に支那式である。此の堂に用ひてゐる花頭窓や圓窓の後ろにたてゝある明障子及び其他のもの、何れもこの様に内部から紙を貼つてゐる。

兩開の扉は、中央の間は巾の廣いのを用ひてゐるから二枚であるが、其次の間には割合に狭いの

を用ひながら、兩折にしてないから、中の二枚は左右に開くが、其兩方の二枚は、夫れ夫れ左と右とに別々に開く様にしてあること、恰も東大寺大佛殿の様である。

例により當代の棧唐戸を短かくかいてみると次の様になる。

前代に引續き愈よ手の込んだものとなり、入子板には幾何模様を刻み、其上を動物(獅子・龍・植物(牡丹最多、其・佛具(輪寶・日光大・天然物(波・同大等(他梅・菊等)を以て飾り、全部漆箔とし且つ彩色を施した。

棧や框は複雑な断面のものもあつたが、多くは几帳面をとり、漆塗とし金蒔繪を施したりした、(日光東照宮)。辻金物の精巧なのは其面に唐草文様を陰刻し、其中心に七寶入の六葉座を打つたのもあつた(同)。また特別の場合には、一建造物に種々意匠の異なつた扉を用ひたりした(崇福法堂福濟)。扉上部に入れる花狹間はいろ／＼の意

匠を凝す様になり、時には菱形の疋繋なぎを入れたが(日光東照宮)、また同時に何等裝飾を施さぬもの、格狹間を入れたもの、或は上半を細かい格子にし、紙を貼り又は紙を貼らず、腰高障子の様にして戸締りと採光とを兼ねしめたもの、(萬福寺)等があつた。要するに様式としては前代の繼承で、裝飾の程度は極端から極端まであつたのである。

(ハ) 花狹間戸

これは新稱である。四方は框で限られた内に全部花狹間を入れたので、これは崇福寺護法堂の花頭窓の後についてゐる兩開の扉の例を、私は今こゝに擧げ得る丈けである。花狹間の工合は、第一六二圖と同じ様であるが、七寶が四隅にないのと、扉の中央に九の代りに五の七寶つなぎがある丈けの差である。この扉は漸く1.56×3.50位の小さいものであるから、まるで模型の様な氣がするが、これ

でもほんどうの扉である。こんなきやしゃなのは、大きな出入口に吊込む様な大きなのをつくることはできまいと思はれる。

第一六三圖はこの扉をはづして、花狭間を明瞭ならしむるため側面から日光をあて、撮つた寫眞である。花頭窓の後ろに若し建具があれば、夫れは殆ど總ての場合兩引の明障子である。この例の如く花狭間を入れた扉を兩開にしたのは珍しいといへるであらう。故に

當代稀に花狭間戸があつた。小型で花頭窓の裏に用ひられた(崇福寺 護法堂)。
といふことに歸着する。